



柳下二美人図 野口小菊 (1847-1917)



美人読書図 野口小蘋 (1847 - 1917)

3. 新出の野口小蘋筆《柳下二美人図》、《美人読書図》と 初期画業について

柳下二美人図（図版Ⅲ） 野口小蘋（1847-1917） 明治5年（1872）8月か 26歳
紙本墨画 1幅 法量131.0×28.2cm
款記「楊柳橋辺楊柳枝 依々裊々弄清姿 江頭無限離人恨 只有曉雲殘月知 林外」
「小蘋戲墨」

美人読書図（図版Ⅳ） 野口小蘋（1847-1917） 明治5年（1872）11月 26歳
絹本着色 1幅 法量26.2×29.3cm
款記「壬申仲冬小蘋寫」
印章「親」「印」（朱文方印・連印）
箱蓋表「先妣小蘋先生美人讀書圖」
箱蓋裏「大正壬戌秋日小蕙郁題」 印章「野口郁印」（白文方印）、「小蕙女史」（朱文方印）

香雪記念資料館では、女性が描いた作品を収集・調査・研究してきた。近代初期を代表する女性南画家・野口小蘋（1847-1917）の作品研究もそのひとつで、これまで15点収蔵している。本年度新たに《柳下二美人図》（図版Ⅲ）と《美人読書図》（図版Ⅳ）を収蔵した。《美人読書図》には画中に描かれた扇面に「壬申仲冬小蘋寫」（挿図1）という隠し落款があり、明治5年（1872）11月、小蘋26歳の年の作であることがわかる。一方、《柳下二美人図》には画中にも箱や付属品にも年記はないが、後に述べる通り、《美人読書図》と同じく明治5年（1872）に制作された可能性が高い。小蘋は、明治後期に女性初の帝室技芸員となり、第1回から4回まで文部省美術展覧会（文展）審査委員を務め、従七位に叙せられるなど、最晩年まで画壇の頂点に立つ南画家として活躍した¹。しかし、幕末から明治初期の10代、20代の頃の小蘋の環境を振り返ると、文久2年（1862）16歳で父を、明治2年（1869）23歳で師・日根対山（1813-69）を、明治3年（1870）24歳で母を亡くしており、明治4年（1871）に25歳で東京へ単身上京した時には、画家として活動の場を広げるために必要な師や両親という支えを失っていた。《柳下二美人図》、《美人読書図》は、上京翌年の、まさに画家としてどのように活動していくか自分一人で活路を切り開いていかなければならない厳しい時期に制作された作品である。本稿では、これら2作品の画題、様式、当時の小蘋の状況などに注目し、東京で画家として歩み始めたばかりの小蘋の初期の作画活動や制作背景の一端を、両図を通して具体的に検証しようとするものである。

両図は共にこれまで紹介されたことのない新出資料であるため、最初に款記の書風を検討することにより小蘋作品であることを確認しておきたい。《美人読書図》の款記を、現在も小蘋の夫・野口正章（1849-1922）の実家のご子孫の家に伝わる、来歴の確かな2作品の款記と比較して検討する。この2作品は、小蘋の十三回忌にあたる昭和4年（1929）に開催された遺墨展に小蘋の長女・野口郁子（1878-1945）の所蔵作品として出品されている²。《美人読書図》と制作年の同じ《美人雅集図》³の款記「壬申晩秋小蘋」と、明治8年（1875）に制作された《美人名花十二友画冊》⁴の款記「乙亥五月中浣／小蘋親画」と比較すると、点画をややくずした書体が共通する。また、落款に共通して書される「小蘋」の各文字は、形だけでなく文字全体のバランスが共通している。特に「小」の1画目の左上から右下へと入る始筆の角度、「蘋」の草冠の1画目から3画目の線の角度や長さまでよく似ている。また、《美人読書図》が小蘋の手による作品であることを示すのは、本図を収める箱に記された小蘋の長女・郁子による箱書である。箱蓋表には「先妣小蘋先生美人讀書圖」（挿図2）、箱蓋裏には「大正壬戌秋日小蕙郁題」（挿図3）とあり、本図が母・小蘋の作品であること、題が《美人読書図》であること、郁子が箱書きを記したのが小蘋が没して5年後の大正11年（1922）秋であることを告げている。また、《美人読書図》の箱書きの郁子の書は、款記の書風比較で取り上げた《美人名花十二友畫冊》の郁子の箱書きの書⁵と、書風、字形ともに酷似しているため、本図の箱書きの筆跡は郁子のものとしてよいだろう。一方、《柳下二美人図》の款記「小蘋戲墨」についても、《美人雅集図》と《美人名花十二友畫冊》の款記

と比較すると、《柳下二美人図》の款記はややラフな筆遣いではあるが、やはり共通する「小蘋」の各文字は、形だけでなく、文字全体のバランス、墨線の角度や長さまでよく似ている。以上のように、新収蔵の《美人讀書図》の小蘋による款記、郁子による箱書き、《柳下二美人図》の款記を比較検討した結果、両図を小蘋の作として問題ないものと思われる。

次に両図の図様について述べる。《美人讀書図》は、縦26.2×横29.3cmのやや小さな画面に、手にした書物を熱心に読む女性の上半身を、赤い七宝文様が施された幕が左右に開けられた円窓越しに描写する。窓の外には白梅が蕾をほころばせており、季節が新春であることを告げている。室内の女性の右後ろの柱には、水墨で岩の背後に菊花と竹が描かれ、金で縁取りされた扇が掛けられている（挿図1）。背後には蘭の植えられた鉢が美しい透かし彫りが施された卓の上に置かれている。梅、菊、竹、蘭は、その高潔な美しさを君子にたとえて「四君子」と総称され、古来、文人に好まれた。これらの植物を画面に描きこむことで絵を見る者に「四君子」のイメージを読み取らせる趣向である。女性の左後ろには、秩入りの書冊と、孔雀の羽と珊瑚樹を挿したガラス製の花瓶が置かれた斑竹製の卓が配され、室内は文人の書斎のような趣である。女性の顔は面長で、目はつり上がり、鼻梁の高い鼻に白い顔料が刷かれている。濃い紅がつけられた受け口気味の唇は開き歯が見えており、書物を音読しているかのようなのである。結髪は島田髷で、間に青い鹿の子をはさみ、櫛と朱の玉簪を挿している。着衣は暗い緑色の無地、帯も寒色系の唐草文様と地味に抑えられているが、襟、袖口からのぞく襦袢の赤、鹿の子絞りで麻の葉柄文様をあらわした帯揚げの赤、唇の紅が、着物の暗い緑色をひきたて画面全体を引き締めている。襟元には、紫のぼかし地に桃花文様の衿と、薄茶地に白菊、雷文、唐草文様の衿が二重に重ねられ華やかである。その華やかさが、読書する女性の真剣な表情を引き立てている。新春の清新な雰囲気を感じられる画面である。

一方、《柳下二美人図》には、やや細長い画面下半分に柳の木の下に立つ正面向きと斜め後ろ姿の二人の女性が描かれている（挿図4）。柳の葉が伸びているため季節は春か夏であろう。結髪は《美人讀書図》と同じ島田髷であるが、櫛、簪、笄などの髪飾りが多く華やかであるため二人の女性は芸妓かもしれない。画面左側へ視線を向ける女性の顔は面長で目はつり上がり、鼻梁が高く、受け口気味の唇をしている。着衣は無地のようであるが、裾に描かれた蕾をつけた梅樹の文様が華やきを添えている。帯には松葉文様、重ねた衿には流水に菊花が浮かぶような文様が見える。裾から覗く足下は裸足で二枚歯の黒い下駄を履いており粋な雰囲気を感じられる。後ろ姿の女性の着衣も同様に無地のようであるが、裾には竹葉文様、帯には亀甲文様と鶴の飛ぶ姿が描かれている。二人の着衣に描かれている松、竹、梅、鶴、亀甲、菊の文様は吉祥や長寿をあらわすモチーフであることから、本図にはそのようなイメージが込められている可能性も考えられる。

図上に讚を書したのは幕末・維新期に活躍した儒学者・廣瀬林外（1836-74）と思われる⁶。名は孝、字は維孝、林外は号である。幕末期の豊後日田（現在の大分県日田市）の儒者で、亀井昭陽（1773-1836）、菅茶山（1748-1827）らに学んだ。廣瀬淡窓（1782-1856）が日田に開いた私塾・咸宜園の2代塾主を任された淡窓の弟の廣瀬旭窓（1807-63）の長男である⁷。旭窓は天保7年（1836）に日田を離れ各地を遊歴し、江戸で林述齋（1768-1841）の下で学び、大坂で私塾を開くなどして多くの知識人と交流した。そのため、林外は幼い頃から日田で淡窓に養われた。林外は淡窓没後の文久2年（1862）に咸宜園の塾政を任せられ、明治4年（1871）まで塾主として塾を経営した。明治5年（1872）上京して太政官正院修史館に勤務するが、明治7年（1874）5月に39歳で病没した⁸。その林外の日記「壬申日記」の明治5年（1872）8月の条に、次のように小蘋の名が3回現れる⁹。以下に小蘋の名が記された日の記述のみ抜粋して記載する。

十一日。東室氏送懐剣。作書十餘紙○吉雄来条園碁。供午食○省軒来○小蘋来。○午牌。同菊瀨小蘋飲池上長舵亭¹⁰。東邀湖山。入夜散。○小宮山来。不值。

十九日。鵜飼小宮山来。○官賜八月月給。○訪省軒。○小蘋送東紙寒具。在事昨日○兄東至。

廿一日。與草鹿遊淺草。飲蕎麥店。○天爵春山来。與甕江長松迂堂天爵朗廬湖山省軒小蘋等。會湯島伊勢萬樓。○夜。訪梅亭。

これらの記述からは当時26歳の小蘋が、林外をはじめ、漢詩人・小野湖山(1814-1910)、漢学者・川田甕江(1830-96)、書家・巖谷一六(1834-1905)ら男性知識人らと親しく交流し、宴席に同席していた様子がうかがわれる¹¹。

小蘋は14歳頃から、父母に伴われて席上揮毫をしながら北陸地方など各地を遊歴し始めた。しかし、名古屋滞在中の16歳の時父が病没したため、小蘋は母を養わなければならなくなり、画家としては未熟なまま自立を余儀なくされた。まだ幼かった小蘋は、名古屋で素封家らの助けを受け、江戸時代的な知識人ネットワークの中で席上揮毫などをして自活した。筆者は、以前、幕末・明治期に活躍した政治家・木戸孝允(1833-77)の日記『木戸孝允日記』の記述から、慶応年間(1865-68)頃京都に出た小蘋が、木戸が自邸や茶寮に漢詩人や画家を招いて楽しむ宴席などに積極的に参加するなどして、知識人ネットワークの中で画家として自立する道を独力で切り開いていこうとしていたことが読み取れることを別稿で述べた¹²。先に述べた通り、明治5年(1872)は、師も両親も亡くした小蘋が単身東京へ上京した年の翌年にあたる。林外の「壬申日記」からも、小蘋が、京都の木戸孝允周辺での活動と同じく、積極的に東京での知識人ネットワークに加わり、その人脈を通して画家としての活動の場を広げようとしていたことがうかがわれる。

林外の讚の書風については、款記の「林外」を、他の林外の書《三行書 七絶》(咸宜園教育研究センター蔵)¹³、《広瀬林外詩書》¹⁴、《七言絶句》(個人蔵)¹⁵の款記の書風と比較検討したところ、《柳下二美人図》の款記の「林」の墨線の右上がりの形、「外」のくずし方が、他の書の款記と共通することが確認できた。また、《柳下二美人図》と《広瀬林外詩書》の讚に共通して書される「月」の文字は、形だけでなく、1画1画の墨線の長さや角度、とめ方やはらいの角度もよく似ている。以上のように、比較検討した結果、《柳下二美人図》の讚は林外により書されたと考えてよいと思われる。

次に《柳下二美人図》の制作背景について検討する。先に述べたように、京都滞在時に小蘋は、頻繁に木戸をはじめ男性画家や知識人と共に揮毫や合作などをしていた¹⁶。小蘋の名が登場する林外の「壬申日記」の条には具体的に揮毫や合作をしたことは記されていないが、《柳下二美人図》に林外と小蘋の印章が捺されていないこと、紙に水墨のみのラフなタッチで素早く描かれたように見えること、描かれている女性が芸妓の可能性が高いこと、小蘋が「小蘋戯墨」と書していること、林外の讚が柳の枝のしなやかに揺れる様を詠いながら女性の美しさを詠んでいることなどから、《柳下二美人図》は林外と小蘋によって宴席で即興的に制作された作品と推定される。林外の日記は、林外が上京した年の明治5年(1872)8月に始まり、断続的ではあるが没年の明治7年(1874)1月まで約1年半続く。その中で、小蘋の名が記されているのが明治5年(1872)8月の3回のみであることから、3回の内、宴席を共にした明治5年(1872)8月11日と21日のどちらかの宴席で《柳下二美人図》が合作された可能性があると思われる。

《柳下二美人図》に描かれた女性の顔を《美人読書図》と比較すると、水墨画と着色画と描法は異なるが、面長の顔、細くつり上がった目、直線的で高い鼻梁を持つ鼻、やや突き出た下唇などの特徴がよく似ている。筆者は林外の日記の記述から、年記のない《柳下二美人図》を《美人読書図》の制作年と同年の明治5年(1872)と考えるが、描かれている女性の顔の特徴が共通することも両作品が同年の制作であることを高める要素であると思われる。

小蘋の美人画については、その制作が明治前期に集中していること、作画期ごとの特徴を検証することによっておおよそ次のような画風展開が見られることがこれまでに指摘されており、筆者もこれまで美人画の画風展開を検証してきた¹⁷。慶応2-明治3年(1866-70)頃の京都滞在時には《美人図》(慶応2-4年〔1866-68〕頃、実践女子大学香雪記念資料館蔵)(挿図5)のような、無背景に芸妓と思われる一人立ちの浮世絵風美人を描いた美人画を制作している。明治5-10年(1872-77)頃には、《美人雅集図》(1872、個人蔵)、《梅園美人図》(1874、所在不明)(挿図6)¹⁸、《美人名花十二友畫冊》(1875、個人蔵)¹⁹、《美人煎茶図》(1876、個人蔵)²⁰など、複数の和装の女性たちが、書、画、琴、立花、煎茶、観梅などの文人的な趣味を楽しむ様子を描いた作品を制作している。和装の女性たちの白く塗られた面長の顔、細くつり上がった目、直線的で高い鼻梁を持つ鼻、やや突き出た下唇などの特徴には、《美人図》(挿図5)同様、浮世絵美人画の強い影響が見

てとれる。

小蘋は、上京後、美人画の画風を変えていく。林外をはじめとした東京の男性知識人と交流する中で、彼らの好みを吸収し、文人趣味を取り入れた和装の美人画に取り組もうと考えた可能性が考えられる。先に取り上げた明治5-10年(1872-77)頃に制作された複数の和装の女性たちが文人的な趣味を楽しむ様子を描いた作品を年代順に概観してみると、次第に画面に描きこまれる文人趣味をあらわす文房具や調度などの様々なモチーフが整理されて少なくなり、画面に余白がとられていく様子が読み取れる。一方、明治5年(1872)制作の《美人読書図》は、四君子をあらわす扇、蘭の鉢植、白梅など文人趣味をあらわす多くのモチーフを描きこみ余白も少ない。やや小さな画面にモチーフを盛り込み過ぎの感を受けるのは、文人趣味と和装美人を組み合わせた画に取り組み始めた時期の作品だからであろう。

次に《美人読書図》に見える円窓越しに女性をとらえるという構図に注目したい。円窓構図と文人趣味を取り入れた美人図については、仲町啓子氏が、中国の美人図の図様をその源泉として18世紀後半から19世紀初めにかけて日本で流派を越えて描かれるようになり、その中で、浮世絵画家たちが中国美人を日本の女性に変えた美人画を展開していくこと、清朝後期の女文人図のような作品に着目して、梅樹と共に円窓の中に文人趣味を嗜む女性を描いた美人画が浮世絵に受け継がれ描かれていくことを指摘され論じられている²¹。《美人読書図》にも梅樹が描かれていることから、本図もそのような浮世絵版画がイメージの源泉となっている可能性が考えられる。一方、小蘋は、煎茶や香を嗜む中国風俗の女性を円窓と共に描く中国の美人画の模写作品を2点遺している²²。両図とも制作時期は不明であるが、このような模写による中国画学習も《美人読書図》に円窓構図が取り入れられた一つの要素となっている可能性が考えられる²³。また、画譜類の図様が参照された可能性も考えられる。制作年はやや離れるが、実際、明治21年(1888)制作の、中国三国時代の姉妹・大喬小喬が兵書を読む姿を描いた《二喬兵読書図》²⁴を、『芥子園画伝』(4集巻之4 美人図 11)の「大喬小喬」²⁵の図様と比較すると、女性たちの顔の角度や向き、左の女性が手にする本の形、右の女性の、左手は袖の中に入れてまま胸元に、右手を膝の上に置いて腰掛けるポーズ、二人の胸元の金属製の首飾り、右の女性の裳の亀甲文様など、細部まで共通する描写が多く見られ、絵画制作の際、小蘋が『芥子園画伝』などの画譜類の図様を参照していたことがうかがわれる。

一方で、《美人読書図》と同年作の可能性がある《柳下二美人図》は、浮世絵風の顔貌描写は共通するものの、描かれるのは芸妓と思われる女性であり、文人趣味をイメージさせるモチーフは描かれない。その意味では、無背景に一人立ちの芸妓と思われる浮世絵風美人が描かれる《美人図》(挿図5)に近いようにも思われるが、図上に林外が書した七言絶句の讃があること、林外と小蘋が同席した宴席で即興的に描かれた可能性があることによって、《柳下二美人図》が、明治に入ってもいまだ江戸風の文化が残る東京で、文人趣味を好む知識人の交わりの中で生み出された作品であることが推察される²⁶。

本稿では新収蔵の《柳下二美人図》、《美人読書図》の図様、制作背景を具体的に検証し、両図を、幕末から明治10年(1877)頃までに制作された小蘋の美人画と比較検証していくことで、《柳下二美人図》が明治5年(1872)制作の《美人読書図》と同年の作である可能性が高いこと、小蘋の美人画の画風が、同時代の男性知識人の好みを吸収しながら変化していくこと、その中で文人趣味のモチーフを取り入れた美人画に画風を展開させていくこと、《柳下二美人図》、《美人読書図》が、無背景に一人立ちの芸妓と思われる浮世絵風美人を描いた美人画から、複数の富裕層と見られる和装女性たちが文人趣味を楽しむ様を描いた美人画へと展開していく過渡期の作であることを提示した。

《柳下二美人図》、《美人読書図》からは、後に、明治期に自立した女性の職業画家としての道を開く先駆者の一人となる以前の、若き小蘋が試みた努力と研鑽の様相が具体的に読み取れる。両図は、いまだ不明な点が多い小蘋の初期の画業を明らかにしていく上で貴重な作品といえるだろう。

(実践女子大学香雪記念資料館 研究員 山盛弥生)

註

- 1 小蕙の伝記については、これまで複数の拙稿で述べてきた。重複を避けるため本稿では詳述しない。伝記については次の拙稿をご参照いただきたい。①「野口小蕙『山水図屏風』について―描かれた「赤壁賦」を中心に―」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第5号、pp.31-40、2008）②「野口小蕙『幽壑閑居図』について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第6号、pp.32-39、2009）③「野口小蕙『設色美人図』について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第8号、pp.32-39、2011）④「野口小蕙筆『設色美人図』」（『國華』1397号、國華社、pp.64-67、2012）⑤「野口小蕙一志を成し遂げた明治の女性画家」（『近代の女性画家 奥原晴湖 跡見花蹊 野口小蕙』小山市立車屋美術館、pp.3-5、2012）⑥「野口小蕙『上巳雛祭図』について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第10号、pp.25-30、2013）⑦「野口小蕙『西園雅集図』について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第12号、pp.46-52、2015）⑧「二人の帝室技芸員 小蕙と松園」（『松園と華麗なる女性画家たち』山種美術館、pp.8-14、2015）⑨「野口小蕙『海棠小窩図』について」（『実践女子学園香雪記念資料館館報』第13号、pp.43-46、2016）
- 2 両図とも、小蕙の遺墨展の際に制作された図録『小蕙遺墨集 乾坤』（2冊、私家版、1929）に、野口郁子所蔵作品として図版が掲載されている。小蕙は郁子の号。
- 3 『野口小蕙と近代南画』（山梨県立美術館、2005）の2図。
- 4 前掲註3の図録3図。
- 5 《美人名花十二友畫冊》の郁子の箱書き及び印章は次の通りである。箱蓋表「先妣小蕙先生設色美人名花十二友畫冊」、蓋裏「大正戊午秋日小蕙都題」印章「郁印」（白文方印）「小蕙」（朱文方印）。
- 6 讀の釈文については、世田谷区立郷土資料館学芸員・武田庸二郎氏、早稲田大学文学学術院教授・池澤一郎氏にご教示を賜りました。謹んで御礼を申し上げます。
- 7 廣瀬淡窓、旭窓、林外の伝記については次の著書を参照した。①「林外廣瀨君墓碑銘」（『林外遺稿 一』清浦奎吾編、田島勝太郎出版、1928）、②「近世漢学者著述目録」（東洋図書刊行会、1941）、③竹林貫一「漢学者伝記集成」（名著刊行会、1969）、④『日田の先哲』（日田の先哲編集委員会編、日田市教育委員会、1984）、⑤『講談社日本人名大辞典』（講談社、2001）、⑥諫元幹夫「廣瀬淡窓とその周辺」（諫元幹夫、2014）。
- 8 漢学者・書家の長三州（1833-95）が撰し、書した墓碑に「（前略）明治維新之際。君來東京。將読洋書。余勸之仕。入史館。七年春有疾。五月十四日竟不起。余亦尋任修史事。（後略）長茂撰」（前掲註7の①所載）とあることから、林外の伝記には、上京について「維新の際」という表記が多く見られる。しかし、明治4年（1871）11月まで咸宜園塾主であったこと、前掲註7の④、⑥では、明治5年（1872）上京とされていることから、筆者も林外の上京を明治5年（1872）と考える。また墓碑銘から、林外が明治7年（1874）の春に病になり同年5月14日に没したことがわかる。
- 9 「林外遺稿巻八」（『林外遺稿 四』清浦奎吾編、田島勝太郎出版、1928）に収録。
- 10 池上長酩亭は、上野の不忍池に迫り出して建てられていた茶店・長酩亭と思われる。『東京景色写真版』（江木商店、1893）に「上野公園不忍池長酩亭」として長酩亭の写真が掲載されている。
- 11 8月11日、19日、21日の条に記される名や号から推察し、以下の通り人物を特定した。各人の伝記については前掲註7の②③④⑤⑥、「人物略伝」（『漢詩人岡本黄石の生涯』世田谷区立郷土資料館、2001）を参照した。

吉雄・菊瀨

吉雄菊瀨（1829-91）、幕末・明治期の医師。名は正安、字は公礼、通称は敦。豊前小倉藩（現在の福岡県）藩医。豊後日田の咸宜園で儒学を、筑前秋月で医学を学び侍医となる。さらに長崎に遊学、大坂の緒方洪庵、長門の青木固弼に学ぶ。嘉永7年（1854）藩内最初の種痘を実施した。後に藩校育徳館で洋学を教えた。明治24年（1891）10月25日没。63歳。

湖山

小野湖山（1814-1910）、幕末・明治期の漢詩人。名は巻、長愿、字は懐之、士達、舒公、湖山は号、別号に晏斎、狂々老夫など。近江（現在の滋賀県）生。梁川星巖の門下に入り「玉池吟社」で頭角を顕す。ペリー来航以來諸藩の志士と尊攘を主張し、安政の大獄に連座し幽閉された。明治5年（1872）上京し詩壇に名声を博す。明治43年（1910）没、97才。著書に『湖山樓詩鈔』『湖山老後詩』など。

省軒

亀谷省軒（1838-1913）、幕末・明治期の武士、漢学者。名は行、字は子省。対馬（現在の長崎県）府中藩士。広瀬旭莊、安井息軒に学ぶ。王政復古を称え、維新に際し岩倉具視を補佐し、新政府に出任。明治6年（1873）官職を辞し著作に専念。大正2年（1913）1月21日没。76歳。著作に『育英文範』『省軒詩稿』。

小宮山

小宮山南梁（1829-96）、幕末・明治期の漢学者。小宮山楓軒の孫。字は伯龜、幼名を酒之介、名は昌玄、通称は紹介、南梁は号。常陸水戸藩校・弘道館の助教として『国史志表』編修に従事。幕末の藩内抗争のため幽閉され、維新後は東京府に勤める。明治23年（1890）皇典講究所の『古事類苑』編修に参加した。日記『南梁年録』をのこす。明治29年（1896）12月24日没。68歳。

鶴飼

鶴飼大俊（1846-78）か。幕末・明治期の僧。浄土宗。江戸増上寺の学寮で学び、儒者安井息軒の塾にも入門。明治3年（1870）同門の雲井竜雄が企てた反政府陰謀事件にかかわり投獄された。明治6年（1873）許され僧職に復帰。大教院大講義となる。明治11年（1878）1月15日没。33歳。尾張（現在の愛知県）出身。字は実証、号は法蓮社性誉円阿、碧窓、独正堂。

または、養鶴徹定（1814-91）か。幕末・明治期の僧。京都で仏教と儒学を、江戸増上寺で浄土宗学を学ぶ。明治2年（1869）諸宗同徳会盟の盟主につき、仏教擁護とキリスト教排斥運動の中心となる。明治5年（1872）浄土宗初代管長。明治7年（1874）知恩院住職。明治24年（1891）3月15日没。78歳。筑後（現在の福岡県）出身。旧姓は鶴飼。号は瑞蓮社順誉金剛宝阿、古経堂、杞愛道人など。著作に『仏法不可斥論』『笑耶論』など。

天爵

岡鹿門（1833-1914）、幕末・明治期の儒者。名は千仞、字は振衣、初名は敬助、鹿門は号。江戸に出て昌平黉で安積良斎らに師事。文久元年（1861）大坂で同窓の私塾「雙松岡塾」を開いて尊攘論を唱えた。のち帰郷して陸奥仙台藩校養賢堂の指南役となる。戊辰戦争では奥羽列藩同盟に反対して投獄された。維新後は修史館協修、東京図書館長などを歴任。大正3年（1914）2月28日没。82歳。著作に『尊攘紀事』『千台史料』。

春山

小山春山（1827-91）、幕末の尊攘運動家。本姓は塚田、名は朝弘、字は毅卿、通称は直三郎、鼎吉。小山馨三郎の父。江戸で尾台榕堂に医学を学ぶ。水戸藩士と交遊し、藤田東湖、大橋訥庵らとも親交があった。文久2年（1862）の坂下門外の変に連座して入獄。のち天狗党の乱にも関与して再入獄。明治24年（1891）1月1日没。65歳。下野（現在の栃木県）出身。著作に『留丹稿』など。

甕江

川田甕江（1830-96）、幕末・明治期の漢学者。備中（現在の岡山県）の人。名は剛、通称竹次郎、城之助、字は毅卿、別号は執齋など。江戸に出て昌平黉に学ぶ。大橋訥庵らに儒学・漢文学を学ぶ。備中松山藩に仕える。維新後は修史局一等修撰、諸陵頭・東宮御用掛などを経て、貴族院議員に勅撰された。著書に『楠氏稿』『日本外史弁誤』など。

長松

長松幹（1834-1903）、幕末・明治期の武士、官僚。長門（現在の山口県）萩藩士。名は文伸、字は子固、通称は別に大蔵、文助。京都で久坂玄瑞らと共に公家と交流する。元治元年（1864）藩にかえり右筆となった。維新後、新政府の史官となり、修史館監事の時「復古記」を編修。元老院議員、貴族院議員。明治36年（1903）6月14日没。70歳。

迂堂

巖谷一六(1834-1905)、幕末・明治期の書家・政治家。名は修、字は誠卿。別号は迂堂・古梅・金粟・呑沢など。近江(現在の滋賀県)の人。水口藩(現在の甲賀市水口町)医の父とは幼児に死別し、母と京都に出て、書を安見氏、中沢雪城に、漢学を皆川西園に、医を三角東園に学ぶ。明治維新前、三条実美を始めとする勤王家らと親交し、維新後は徴士議政官吏官、太政官内史となった。内閣書記官・元老院議員、貴族院議員を歴任。日下部鳴鶴と並び明治書家の双壁として人口に膾炙した。

朗廬

阪谷朗廬(1822-81)、幕末・明治期の漢学者・教育者。通称は素三郎、希八朗、名は素、字は子絢、朗廬は号。備中川上郡九名村(現在の岡山県小田郡美星町)の造り酒屋に生まれた。大坂で大塩平八郎に学び、江戸で同郷の昌谷精溪の門に入り、後に古賀侗庵に師事した。のち、郷里の備中に帰り、郷校の興譲館館長となる。維新後、陸軍、文部、司法などの各省に出仕したが、病により辞任した。著書に『朗廬文鈔』『田舎話』など。

- 12 小蘋の名古屋や京都での最初期の画業の様相や制作背景については、以下の拙稿で具体的に提示して述べた。前掲註1の論文③、④、⑥。
- 13 林外の書《三行書 七絶》については、日田市教育庁咸宜園教育研究センター兼世界遺産推進室・溝田直己氏より画像を頂戴した。林外の書が掲載されている資料等についてもご親切にご教示いただき貴重なご助言を賜りました。謹んで御礼申し上げます。
- 14 『淡窓遺墨集撰』(廣瀬淡窓遺墨刊行会、1966)所載。
- 15 《七言絶句》については、ご所蔵者の諫元幹夫氏に画像をお送りいただきました。他にも複数の林外の書が掲載された御著書、ご所蔵作品の款記の画像をお送り戴き、貴重なご助言も賜りました。謹んで御礼を申し上げます。
- 16 前掲註1の論文③、④。
- 17 平林彰「野口小蘋試論」(前掲註3の図録所載)。前掲註1の論文③、④。
- 18 前掲註2の図録の坤冊に所載。
- 19 前掲註3の図録3図。
- 20 前掲註3の図録4図。
- 21 仲町啓子「日本近世美術における文人趣味の研究ー一 栄筆梅窓美人図と女文人図の流行」(『実践女子大学美学美術史学』第13号、実践美学美術史学会、1998)。
- 22 香を嗜む中国風俗の女性の上半身を円窓からのぞかせる《小青第三図》と、円窓を背景にして室内で二人の中国風俗の若い女性が煎茶を楽しむ《美人和羹図》である。両図とも小蘋の夫・野口正章のご子孫の野口家に伝わったもので、《美人和羹図》の原本である中国絵画も一緒に伝わる。前掲註3の図録11、12図。
- 23 実践女子大学教授・宮崎法子氏から《美人読書図》に見られる文人の文房を思わせる小道具に囲まれた女性を円窓越しに見せる図様には、18世紀初頭に雍正帝の皇妃を描いたとされる《胤禛妃行楽図》(12幅、清、絹本着色、縦184cm×横98cm、北京故宫博物館蔵、『地上の天宮 北京・故宫博物院展』東京富士美術館、2011、図65)のような作品の影響が考えられるとのご指摘をいただいた。その他にも多くのご教示を賜った。謹んで御礼を申し上げます。荒井菜穂美氏は『野口小蘋の画業Ⅰ 人物画の展開』(関西大学大学院東アジア文化研究科、2013)で、小蘋が中国絵画や文房具を模写して図版を担当して、明治24年(1891)5月に大阪で開催された煎茶会の図録として刊行された『墨縁奇賞』(奥三郎兵衛、私家版、1893年)の図様が、小蘋の中国風俗の美人画に転用されていることを指摘されている。
- 24 前掲註3の図録10図。
- 25 『芥子園画伝』(4集巻之4、1818)
- 26 円窓から竹がのぞく室内で3人の和装の女性が煎茶を楽しむ様子を描いた明治9年(1876)作の《美人煎茶図》(八百竹蔵、前掲註3の図録4図)には、図上に小蘋が自作の七言絶句を書いている。ただ文人趣味を取り入れた美人画を描くだけでなく、自分が描いた作品に相応しい漢詩を自身で作って、それを作品に書すという文人的な営みを、小蘋が次第に志向していく様子がうかがわれる。



插图1 野口小蘋《美人読書図》 款記・印章部分（扇）

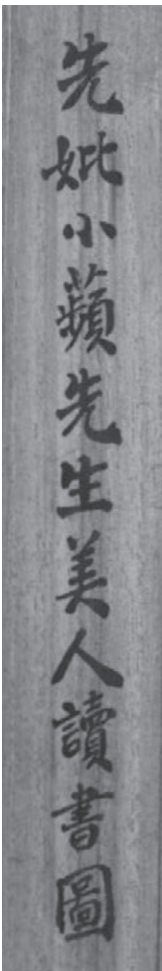


插图2 野口小蘋
《美人読書図》
箱蓋表



插图3 野口小蘋
《美人読書図》
箱蓋裏



插图4 野口小蘋《柳下二美人図》 部分



插图5 野口小蘋《美人图》慶応2-4年(1866-68)頃
 実践女子大学香雪記念資料館蔵



插图6 野口小蘋《梅園美人图》明治7年(1874)
 『小蘋遺墨集 坤』(私家版、1929)所載